

民俗建築アーカイブ

Minzoku Kenchiku Archiives

薬師寺三重塔の屋根に立った学生 たち

民俗建築アーカイブ担当

A standing students on the roof of
three stories pagoda, Yakushiji
temple

Editorial Committee

「民俗建築アーカイブ」、では、昭和8年に撮影した正福寺地蔵堂（東京）と金閣（京都）の写真について、当時と現在の建物の違いを比較した。今回は奈良の薬師寺を取り上げてみる。

佐藤重夫氏が残された写真の中に昭和8年に撮ったという薬師寺の写真が7枚あった。その写真の中に高い所から境内を撮った写真(1~3)があり、更に驚いたことにはその中に屋根に上がってこちら向きにカメラを構えた学生服姿の写真があった(写真4)。この写真には“菅田君薬師寺東塔上にて”と裏書されている。写したのは佐藤先生に違いない。何と菅田君と云う学生が薬師寺東塔の屋根に上がって、塔の高欄にいる佐藤先生を写そうと

カメラを構え、佐藤先生はその反対に菅田君を撮ったのであろう。周辺の景色から見て、菅田君は三層の高欄から二重の屋根に下りて高欄の佐藤先生と写真を撮りあったものである。学生の茶目っ気あふれる姿に思わず笑いが誘われるが、それにしても国宝の屋根に上がって写真を撮っている学生服の青年など、今の感覚では想像もつかない。この写真ばかりでなく、他の周辺の写真も今の境内にない建物が写っていて極めて興味深い。昭和8年に薬師寺東塔の三層から撮ったこれらの写真は、境内にある堂宇が今のものとは大きく違っていることを見ている。今に残された貴重な写真なのである。

薬師寺は長い歴史の中で幾度か災害にあって、創立当初の建物で現在残っているは国宝の指定を受けている東塔と廻廊の外にある東院堂だけである。昭和50年代になって金堂、大講堂などが建立され、華麗な伽藍が現れたが、再建以前の薬師寺の建物はあまり写真に残されていない。

ところで、一般の見学者は塔の上層には上がれない。この写真が取られた経緯に興味を抱いた。佐藤先生がご存命のときにこの写真を知っていたなら、思い出話を伺えたはずだが、いまは想像しかない。むぼうにも勝手に推理を進めてみた。

昭和8年と云うと、佐藤先生は大学3年のときである。この時期、佐藤先生と菅田氏は個人的に二人で薬師寺にきたのではないだろう。いかに建築学科の学生と云えども簡単に上層へ上がることはできない。そもそも、塔（塔婆）は上層へ上がるものではなく、一般には階段もついていない。極めて大きな塔では二層に上がる急な階段がある場合があるが、それは例外である。宮大工が修理のために上層へ上るには梯子をかけるのである。梯子は常設もあるが使うたびに架ける方が多い。これらのことを考えると東大の学生が個人的に来たのではなく誰かに引率されて、事前に寺の了解を得て見学に来たのであろう。それでは引率の先生は誰であろうか。

佐藤先生は昭和6年に東大に入学されている。そして昭和9年3月、22歳で東大を卒業しておられる。旧制の大学であるから就学年数は3年なのである。昭和8年の頃、東大におられた社寺建築の先生は、と考えると、藤島亥治郎先生しか見当がつかない。奈良の社寺や文化財に関しては関野^{ただし}貞教授が第一人者であるが、昭和8年当時すでに関野先生は東大を退官されており、その2年後に67歳で亡くなられている。この状況から見て関野先生ではない。その点、藤島先生は昭和4年（1929）に韓国の京城工業学校が

ら東京帝大に助教授として赴任されたばかりで、30歳のときである。その翌々年に佐藤先生が東大に入学したわけで、藤島先生と佐藤先生の師弟関係の時期は完全に一致している。藤島先生はフィールドワークをよくされていたというし、佐藤先生も同じ研究姿勢であるから、調査に良く同行されたであろう。昭和6年に調査に同行したとき小仏峠で藤島先生が椅子に座って書き物をしている姿を佐藤先生が描いた絵が残っている（図1、『彩雲』 - 佐藤重夫先生作品集 - より）。

この薬師寺の写真は藤島先生が学生たちを引率して見学したときのものであろう。それにしても当時の社会は文化財の見学に対して大らかな、特に学生の見学には理解を示して対応してくれたよき時代と云えるのである。

さて、それでは佐藤先生の親友“菅田君”とはどんな人なのか。菅田氏のことを知りたくて調べてみた。平成11年（1999）発行の東大建築学科卒業生名簿『木葉会名簿』を見ると、昭和9年（1934）卒業（第54回）のところに、佐藤重夫（六高）日本民俗建築学会会長、と載っている。このときご存命の方は佐藤先生の他に8名のみであり、すでに鬼籍に入っておられる方のお名前が21名載っている。その中に菅田豊重氏のお名前もあった。名簿発

行時の平成 11 年は、佐藤先生は 87 歳のときである。このとき菅田氏はすでに亡くなっておられた。菅田氏についてはもっと古い名簿をさがして調べてみなければ分からない。佐藤先生は几帳面に様々な記録を残されているから、菅田氏に関する何か残っているのではないかと思い、佐藤先生のご長女佐藤禎子様にお尋ねしたところ、さっそく古い名簿や写真を探してくださり、回答を寄せてくださった。それによると菅田豊重氏は大阪高校卒業で、東大卒業後は大林組設計部に勤めておられたという。奈良県生駒郡三郷村大字勢野に住んでおられて、菅田氏が亡くなられるまで佐藤先生との親交が続いていたとのことである。

そんなことを調べたり想像したりして悦に入っていたが、しかしまだ沢山の疑問も残り、この推理に一抹の不安を抱いていた。

ところが突然、全ての疑問に対する解答が天から舞い降りてきた。いや、筆者が勝手に想像しているのを天の佐藤先生が見かねて、助け舟を差し出してくれたのだろう。それは全く偶然にも佐藤先生が広島大学を定年退官（昭和 50 年 3 月）したときの最終講義録に目を通して発見したのである。そこに書かれている一文が全ての疑問を解明することになった。それは以下の通りである。

「東大建築学科にはいりまして、1 年の時に先づ見学会がありました。今スライドに映っていますが、当時の若かりし頃の岸田日出力先生の写真であります。われわれ有志学生 10 数人と岸田先生と関西旅行に行きまして、奈良西郊の薬師寺に行った時の写真であります。当時（昭和 7 年）はヨーヨーというたわいもない玩具が流行っていた時代であります。（中略）このスライドでヨーヨーをやっておいでになるのが岸田先生であります。奈良の駅で御自分でもやってみようというので、御自分で買ってみえて、それで薬師寺へ持って見えまして、われわれは東塔の方へ登っておりましたが、先生はここで、なに、わけないよとヨーヨーを初めてやっただけになる。たいへん今は亡き恩師にわるいんですけれども、先生は負けずぎらいのところもある磊落な先生でありました。（中略）お前たちは登って来いというわけで、先生をヨーヨーにお休憩願ひ、われわれは薬師寺の東塔に登りました。こういう国宝建造物も建築の学生にだけは、当時はよく開放して見せていただくことが出来まして、登ることが許されたわけであります。裳層の部分から入り、その上の屋根の骨組の中に登り、屋根上に出て裳層に上がり、上層の屋根の中に入るということを繰返して、一番上に登り、露盤

の下の処に、屋根上に出る穴がありまして、そこから三層の屋根に登ります。そこから屋根の上をずっと歩きまして、下様の先端まで行った友人もいましたが、私はまあ其処まではよう行きませんでした。それから露盤に上がり、とうとう相輪を登ったりなんかしました。ずいぶん無茶なことをしたものだと思うのですが、今ではとてもそんなことは許されません。しかしもちろん、そこは建築に志す学生のごことで、十分傷つけぬよう心しているわれわれであるという誇は持っていました。」
(振り仮名は筆者加筆)

という文章であった。まったく、想像をはるかに超えた驚くような事が書かれていた。それとともに蔵の奥深くにしまわれていた宝物を発見したような喜びに雀躍した。

しかし新たな疑問もわいた。最終講義では、薬師寺を見学したのは大学に入学した年であり、その時の写真は昭和7年で、学生を引率したのは岸田日出刀教授であったというのである。それはともかく、筆者は、内部から梯子をかけて初層の小屋組まで登り、梁を足がかりに順次上層へ登っていったと思っていたが、まさか初層の裳階から上層に入る口があるとは知らなかった。しかも三層の屋根まであがり、相輪にまで登ったというから仰天してしまう。相輪の天頂に祀る水煙に彫

られた12人の飛天を間近に見られたに違いない。全く信じられないほどのうらやましい話である。

ただ、思い直してみると、裳階にある入り口と云っても、どこにそんなものがあるのか見たことが無い。あらためて三重塔の写真を集めて軒裏の隅から隅まで調べてやっと見つけることができた。三重塔の北面の初層の裳階と屋根の間に矩形の開口部がついている(写真5)。佐藤先生たちは梯子で初層の裳階に上がり、この入口から入って小屋組を登っていったのである。学生服の東大生が、嬉々として登って行く光景が目に見えんできた。その頃は大学生活にもまだまだ青春の輝きがあふれていたときであった。その10年後は学徒出陣で銃を担いで死地に送られていく緊張した時代が変わった。

さて、最終講義にはさらに興味深い話が盛り込まれていた。読んでみよう。

「また私はたいへん幸なことに、伊東忠太先生、塚本靖先生、関野貞先生の御三方の名誉教授特別講義を聴かしていただいた最後の頃の学生の一人でありました。私の級の中での常連の受講生は私の他に奥村音造君という、天理教本庁で現在匠の頭のような重鎮におられる方と、もと大林組にいて現在は関西大学教授である菅田豊重君でありました。これがまた私にと

っては有難い幸いで、今も感謝しています。(中略)伊東先生からは他の二人が欠席しますと、時には一対一で講義を伺ったこともありました。サラセン建築史、東洋建築史を聴きました。また関野先生からは朝鮮建築史を教わりました。」とある。

佐藤先生が名誉教授特別講義を受講した学年は明記されていないが、おそらく3年生の時であろう。伊東忠太先生の講義を佐藤重夫、奥村音造、菅田豊重の3人の学生が受講していて、「他の二人が欠席しますと、時には一対一で講義を伺ったこともありました」と述べている。佐藤先生は何とうらやましい体験をされたことだろうと思うのであるが、緊張もされたのではなからうか。一緒に学んだ菅田豊重氏は大林組を退職した後、関西大学の教授になっておられたようだ。

さて、薬師寺を見学した経緯は分かったが、また新たな疑問が生じてしまった。それは薬師寺を見学したのはいつなのかである。最終講義録では入学早々であると言い、その時の写真が昭和7年と云っている。さらに「民俗建築アーカイブ」に記録した写真の原版には昭和8年と裏書されていた。どれが正しいのか判定しなければならなくなった。

まず、大学に入学して早々に見学したということに疑問が生じる。多くの

大学は入学して早々の遠距離の旅行は少ないし、先生とのつながりも少ない。2年以上になって専門科目の授業が多くなるが、専門知識が高まるのは卒業論文に取り組む3年生のときである。このときにはゼミの先生など専門科の先生との調査や見学会が多くなる。仮に入学時に専門科の先生との交流があったとしても、オリエンテーションの一環として都内の建築を見学する程度であろう。10数人の学生有志を岸田先生が薬師寺に連れてくることは考えられない。

それと、もう一つ、岸田先生がヨーヨーに挑戦した様子が書かれているが、調べてみるとヨーヨーが大流行したのは昭和8年である。きっかけはこの年、洋行帰りの人がアメリカ土産として持ち帰って流行らせたのであるが、翌年初夏には流行も沈静している。このことを考えると、やはり昭和8年の大学3年の時の旅行でなければつじつまが合わない。岸田先生は日本建築に関心を持つ学生を集めて修学旅行のつもりで奈良に行ったに違いない。謎解きゲームの謎が解けたような思いであったが、佐藤先生の最終講義の勘違いを指摘したようで、恐ろしいほどに責任を感じながらこのように結論付けた。

さて、佐藤先生たちが薬師寺を見学したのは昭和8年であると分かったが、

季節はいつか気になってきた。菅田氏は学生服を着ている。写真1や写真6にみえる遠くの水田は水を入れたばかりか、薄く濡れて光っている。畑はワラニオが並び、作物は植えられていない。落葉樹は新芽が出たばかりで葉はまだついていない。これらから季節は早春で、おそらく3月か4月の初め頃であろう。そうだとすると、3年生になる春休みを使って、旅行をしたと思われる。卒業間近の春だと昭和9年であり、ヨーヨーも沈静している。ということで、謎は解明されていった。

さて、写真の分析に取りかかろう。薬師寺東塔からの写真はパノラマを意識して撮ったのではないが、幸いに写真(1~3)の3枚はつながりがあった。欠けた部分はあるが3枚を繋ぎ合わせたのが写真10の「薬師寺全景」である。このようにしてみると当時の様子がよく分かる。真下の中央に見える大屋根は流れ向拝付き入母屋造の仮金堂である。これは1528年に戦火で消滅したあと金堂の復興までの予定で建てた仮金堂であるが、昭和8年の頃は仮金堂のままで、昭和51年(1976)に念願の本金堂が建立されるまで残っていた。現在、この建物は興福寺の仮中金堂として移築され、寄棟造りに改造して前部の庇(向拝)も取り払われ、外観は大きく変わっているが、現存しているだけでも貴重である。

仮金堂の後方にある寄棟造りは仮講堂である。これも昭和56年(1981)に講堂の復興に着工するまで残っていたが、今は新しい大講堂に変わっている。その後の仮講堂の建物はどうしたか調べきれしていない。

この写真を見ると境内の外周には松を主体とした樹木がたくさん植えられ、境内にも大小の松がみられる。ここで注目したいのは、昭和8年の写真には境内の西側に三字の堂がみられる。一番南にある堂は方形ほうぎょうのような屋根であるが露盤はなく箱棟のようなものが載っている。火灯窓らしいものも見える。その隣は入母屋造りのお堂で、地藏堂のようなものであろうか。その隣は仮金堂の陰にあるが、建物は寄棟造りで棟に越屋根が載っているのがみえる。しかし今はすべて無いはずである。現在はどうなっているのか調べるため、平成27年3月9日、筆者は奈良へ向った。東塔は平成21年から解体修理に入っていて、今は覆屋がかけられていることは承知であったが、境内の様子や金堂、講堂の写真撮ることを目的として訪れた。事前のポイントメントはとっていなかったが受付で目的を話して見たら、工事事務所と連絡を取ってくださり、図らずも工事担当の方とお会いすることができた。事務所主任の猪又規之氏は突然の訪問にもかかわらず快く応

対してくださったことに感謝した。持参した昭和8年の薬師寺の写真にも関心を持っていただき、写真に写っている境内の位置を案内してくださった。更に東塔の覆屋の中も入れてくださり、佐藤先生の写真と同じ高さの位置で写真を撮ることができた。もちろん塔は解体されており、地下の発掘調査の状態も見ることができた（写真7）。薬師寺で受けた対応はありがたく、極めて幸運であったが、ただ一つ不運だったのは、寒冷前線と遭遇し寒さと強い雨に終日見舞われたことである。そのため視界も悪く、雨滴がついて満足な写真が取れなかったのが残念であった。

また、昭和8年の写真にあった堂宇の所在は分からなかったが、猪又氏の話では、境内の堂宇は周辺の塔頭^{たっちゅう}に移築されていることが多いということであった。

さて、菅田氏が立っているのは二重の東南の隅棟である。眼下に見えるのは東院堂（国宝）であり、その全体が写真8である。3月9日に撮った写真9と比べてみても少しも変わっていないが、ただ現在は東塔と東院堂の間に廻廊が廻っていて、この高さから写すと廻廊が入ることになる。東院堂の裏は池になっているのがよく分かるが、現在は樹木が繁って池は見えない。当初は南向きの入母屋造りであったが、

江戸期に池の拡張によって南向きから西向きに変わったという（猪又氏）。

写真11は現在の金堂（裏面）である。裳階つき二層入母屋造の立派なものである。

写真6は塔から東方を見たものである。広々とした田園が広がり、その中に農家の造りがみられる。彼方に見える山の中央付近は春日山であり、奈良の都が栄えたところである。写真12は不鮮明であるが、覆屋に登って写真6と同じ位置で東方を見たものである。昭和8年と現在の違いは一目瞭然であるが、遠方の山の中央辺りが春日山であるのは見て取れる。

写真1は塔から西方を撮ったものである。境内の樹木の向こうには近鉄橿原線が通っているが、その向こうは田畑で、よく見ると長屋門のある農家が2軒並んでいる。茅葺もあり大和棟もみられて、のどかな田園風景を展開している。

このように当時は和辻哲郎の『古寺巡礼』や堀辰雄の『大和路・信濃路』など多くの作品に描かれた詩情あふれる景色そのものだったであろう。その中を岸田先生と学生服の一团が帰ってゆく。佐藤先生の思い出に残る岸田先生は「負けず嫌いのところもある磊落な先生でありました。一方、美や善に対する直感は鋭く、良くないことには厳しく、また、たいへん先生には

叱られたものです。物凄く叱られまして、もう取りつく島もないというわけで、みんな逃げてしまうというようなことでございます。」というほどの厳しい先生が、片手にヨーヨーを持って、学生たちと談笑しながら夕景の古都路を帰ってゆく。どこからか鐘の音が聞こえてくる。そんな光景が思い起こされた。佐藤先生の残された数枚の写真は、当時の学生の青春の輝きそのものであり、良き師良き友への賛歌であると思った。

謝辞 薬師寺の建物については、奈良県文化財保存事務所薬師寺出張所主任の猪又規之氏にいろいろとご教示戴き、また、写真撮影に大変ご協力を戴きました。厚くお礼申し上げます。また、佐藤禎子様には菅田氏の情報を戴き、写真は同行の金谷匡高氏に協力いただきました。厚くお礼申し上げます。